
ニュース？澄透婁！

カオス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニユース？澄透婁！

【Nコード】

N3085L

【作者名】

カオス

【あらすじ】

お金持ちの学園で旭 剣と上林 綾鷹を中心に仲間との学園生活を書いた作品です。

プロローグ（前書き）

初めての作品です。不慣れなところもありますが暖かい目で見守ってください。

プロローグ

その日 旭あさひ 剣けんは、機嫌が悪かった。

その旭 剣は、身長160?程の小柄で茶色い瞳に茶髪のアトリー
トである。ついで顔は、童顔である。

「うるさい?」

どうやら、童顔を気にしているようだ。彼は、今日から澄透婁学園
に入学する予定で新しい学校の生活に胸を踊らしていた。

澄透婁学園は、小学校から大学までの一貫性のお金持ちの学園だ。

旭 剣は、剣道の全国大会に出場する選手の中でもトップクラスの
実力の持ち主で剣道の特待生として高校から澄透婁学園に編入する
ことになった。しかし、入学式の朝澄透婁学園の大きさに驚きつつ
も新生活に期待しながら歩いていると、後ろから3〜4台のバイク
がすぐ横を通って行った。ケガは、なかったがバイクの出した排気
ガスや土煙りで新品の制服(学ラン)が汚れてしまった。汚れは落
ちたが剣は、イライラしながら入学式を聞き流した。
そして、HRが終わり放課後。

剣は、この後の入寮式のため寮に向かっていった。

プロローグ（後書き）

中途半端で終わりましたが次からもう一人の主人公上林 綾鷹が
出ます。お楽しみが。

第1話（前書き）

第1話です。自分社会人で仕事がありますが一週間に1回ぐらいのペースで頑張って行きたいです。

第1話

「ふあゝあ眠い」

今欠伸をしたのが上林かみはやし 綾鷹あやたか。

身長180?程の長身痩躯で短めの黒髪に紅い瞳をしている。

「まったく、雪菜せしなの奴まだこねーのかよ」

校舎の外で綾鷹は、言った。

どうやら誰かを待っているようだ。それから、2、3分待っていると校舎の中から6人程男子を引き連れた奴がこちらの方にまっすぐ歩いて来た。

そいつらは、綾鷹の前で止まり綾鷹の学ランの襟えりに着いている学年証を見てから言い放った。

「一年そこをどけ」

「ああ、何だつて!」

綾鷹は、上林グループの御曹司だが気は長くない方で売られた喧嘩は買う主義である。「邪魔だからどけて言っただよ。先輩の言うことが聞けねーのか」

リーダー格と思しきロン毛の男が言つとそれに続けて取り巻き達が「そーだそーだ」「一年坊が調子乗るな」等騒ぎ立てそれを聞いた他の生徒が周りに集まって来た。

綾鷹は、周りを無視してロン毛の男に言った。

「横に避ければいいだろ。お前馬鹿か?」

「ばっ、馬鹿。貴様鈴木グループ御曹司この鈴木一郎に向かって馬鹿とは何だー!」

「そーだそーだ」「鈴木さんに向かって馬鹿とは何だ一年坊」とまた取り巻き達が言う。

「はっ、鈴木グループがどうしたって言うんだ。馬鹿に向かって馬鹿と言って何が悪いバカ」

と綾鷹が挑発すると周りに集まった生徒達が「鈴木のカカ」と

言い始める。

それに鈴木一郎は、少し体を振るわしてから綾鷹を見て言った。「貴様にこの澄透婁学園高等部における暗黙のルールを教える必要があるな。」

「高等部の暗黙のルール？何だそりゃ」

初めて聞く言葉に綾鷹は頭に疑問符を浮かべると鈴木が腕を挙げながら言った。「澄透婁学園高等部の暗黙のルールは、勝った奴が全てだ。」

頭の上に挙げた手の指を鳴らす。

鈴木が指を鳴らすと綾鷹の後ろ10?程の所からナイフを持った奴が綾鷹に突っ込んで来た。

「なっ!?!」

〈剣 視点〉

旭 剣は、入寮式のため寮に移動中である。

この時の剣は学ランに右手にクロカバンと竹刀が入った竹刀袋を持ち左手には胴着等が入った袋を肩に提げていた。

校舎を出ると輪の形をした人だかりができていた。

剣は、機嫌が悪かったが好奇心に負け人だかりに向かった。

人だかりの間を抜け輪の中に入ると中には1対7で対峙していた。

7人のグループには知っている人は、いなかったが1人の方には見覚えがあった。

同じクラスの名前は確か上林 綾鷹だった気がする。背が高く自信に満ちた声が印象的だった。

そんなことを思っているとグループの先頭にいるロン毛の奴が指を鳴らした。すると綾鷹の10?後ろからナイフを持った男が綾鷹の向かって飛び出して来た。

それを見た瞬間剣も綾鷹に向かって走り出した。かばんと袋を投げ置き左手に竹刀袋を持ち何も考えずに走る。

「なっ!？」

綾鷹がナイフを持つ男に気付くが避けられない。

剣も一瞬出遅れたために手が届かないが左手に持っている竹刀袋を腰の横に付けて右手で袋の中から竹刀を抜刀する。

竹刀は、男のナイフを持った手に当たりナイフは男の手から落ちる。それに綾鷹が男の顔面を蹴り飛ばす。男は数?飛んだ後気絶したらしく起き上がらなかった。それを確認したのか綾鷹がこちらを向いた。

「所でお前誰だ」

と綾鷹が聞いてくる。

「同じクラスの旭 剣だよよろしく」

綾鷹は、それを聞いて少し思案してから

「聞き覚えねーな…あつ、もしかして編入生か」

「うん、そーだよ。剣道の特待生だよ」

「所でお前は、なんで俺を助けたんだ」

それに剣は、

「なんでと聞かれたらまー考える前に体がかって動いてきずいたらこーなつてたんですね」

「特待生がこーいう事するなんてお前実は馬鹿か」

剣はそれに笑って

「ハハハ、確かに僕は馬鹿かも知れませんが」

「お前いや剣でいいか俺の事は綾鷹でいい。おもしろいし気に入った。お前俺の友になれ」

一見強引だが剣はそれはいいなーと思った。

「うんいいよえー…とっ綾鷹友達になろう」

それから右手を出すと綾鷹も右手を出して握手をした。

いきなりの剣の乱入で茫然としていた鈴木が我にかえった。「テーマ 乱入なんて卑怯だぞ」

「何言ってるんですか?対1なのにさらに後ろから奇襲かけておいで1人の乱入で騒がないで下さい」

それに綾鷹が続ける。

「さつき勝った奴全てなんて言ったのはどこのどいつだったかねえ」と、わざとらしく言う。

「テメーらもう赦さん」

とうとう鈴木がキレた。

「お前らコイツらをやっちまえ」

それに男子達が「オオー」等と騒ぎどこに持っていたのか鉄パイプやらナイフを取り出す。

「ハッ、喧嘩上等」

「では全力で行きますよ」

そう言つて綾鷹は構え、剣は竹刀を構えた。

「所で綾鷹は、何か武術やってるの」

「ふふふ聞いて驚け今まで10以上の武術をやってオリジナルの俺式武術を編み出したのだ武術名絶賛募集中だ」

「それはどんななのか楽しみだね」

「俺の華麗な武術に見とれて負けるんじゃないぞ」

「気をつけておくよ」

等と言っていると鈴木が

「お前らかかれ」

そして綾鷹と剣の2人の出会いはこうして始まった。

第1話（後書き）

皆さんこの作品はどうですか楽しんで読んでいただけれますか。剣君は、剣道の選手ですが私は剣道について全くの素人。だれか剣道について教えていただけませんか。感想も待ってまゝです。

第2話（前書き）

更新が遅くなりすみませんでした。次は、もう少し早く更新したい
と思います。

第2話

鈴木の「お前らかかれ」を合図に喧嘩が始まった。
鉄パイプを持った男が3人、ナイフを持った男が1人、素手の男が2人。3、3に別れて剣と綾鷹を攻めるつもりだ。

〈剣 視点〉

剣は、竹刀を構えて相手を見た。

鉄パイプが2人にナイフが1だ。

「オリヤアアア」

鉄パイプを持った男が1人（これを鉄1と名付ける）が正面から突っ込んで来る。剣は、それを左に避けすれ違いざまに竹刀で鉄1の足に引っかけける。

「ウワツッ！」

鉄1が派手に転ぶ。これで鉄1は数秒動けない。その間に残りの2人を…

「貰った」

「くっ！？」鉄1の影に隠れていたナイフの男（ナ男と名付ける）が切りかかって来た。

結論から言うと剣は無事だ。ナ男の攻撃に剣は、とっさに反応して顔を反らしたが左目の下を掠る。

「ハアツッ！」

それを無視してナ男の首に竹刀を叩きナ男を気絶させる。それから数歩下がり目の下の血を拭う。

鉄1ともう一人の鉄パイプの男（鉄2と名付ける）が左右から同時に鉄パイプを振り下ろして来た。

それに剣は、竹刀を右手で構えた。

剣に同時に振り下ろされる右側からの鉄2の鉄パイプを竹刀で弾き、

左側からの鉄1の鉄パイプを紙一重で避け左手で鉄1の鳩尾に拳を放つ。鉄1は、その場にうずくまる。さらにそのまま左手でとどめの手刀を首に放つ。「私の相手をしてるのはあなただけです。諦めてくれませんか。」

鉄1が倒れたのを見て竹刀を構え直しながら鉄2に言ってみたがどうやら聞く耳持たぬようだ。

鉄2が鉄パイプを横に薙ぎ払う。

剣は、身を引くくして鉄パイプを避け低い体勢から竹刀を突き出す。竹刀は鉄2の胸に当たり咳込みながら倒れた。それから綾鷹を見ると綾鷹もちょうど終わったらしく綾鷹と目があった。

（綾鷹 視点）

鈴木のかかれの合図で鈴木6人の手下が3、3に別れて迫ってきた。

俺の方には、素手の奴が2人と鉄パイプを持った男が1人やって来る。

俺は、おもむろに学ランを脱ぎ中のカッターシャツのボタンを全て外す。カッターシャツの下は赤いインナーである。

「ハッ、かかって来いよ。一瞬で俺様が返り討ちにしてやるよ。」と俺が挑発すると素手の2人が時間差をつけてかかって来た。

「ふざけてんじゃねえぞ」

そっぴいなながら1人が殴りかかる。

「遅いな」

俺は男の拳を受け止め腕を取り関節を決める。

「いててて」

「うるせー、よっと」

俺は、そのまま肩の関節を外す。それから殴りかかって来る男の拳を関節を外した男の顔面を受け止める。それで男は気絶した。

「お、おい大丈夫か」

「よそ見してるんじゃないよ」

気絶した男を横にほうり出してもう一人の男の服を掴む。

「でりゃああ」

柔道の背負い投げで男を地面に叩きつける。これで二人目終了後一人。と思つた所に後ろから鉄パイプが左肩を襲う。

「ぐっ!？」

綾鷹は、次の一撃が来る前に鉄パイプの男（以降鉄男）がいると思つ所に左の裏拳を放つ。しかしそれはあっさり避けられ鉄男は距離を取る。

綾鷹は右肩を見ながら

「不意打ちとは味な真似してくれるじゃねえか」

鉄男は仲間の2人がやられるのを見ながら綾鷹の隙を伺つていたのだ。

「勝てば問題ない」

「雑魚が吐かせ!」

強きに言つたはいいが右腕が動かん。さっきので肩が外れたらしい。治せなくはないが相手がそんな時間をくれるとはおもえん。

「右腕が動かないようだが大丈夫かあ？」と、鉄男はわざとらしく言う。

「貴様なんかの雑魚相手ならこれくらいがちょうどいいハンデだよ」

「その言葉後悔するなよ」

「さつさとかがつてかいや!」

その後、鉄男の持つている鉄パイプの攻撃を左手で流す防戦になり10回程受け流す。

「いい加減にくたばりやがれえー」

痺れを切らした鉄男が上段から鉄パイプを振り下ろす。

「劣化版・虎門掌底激」

右足で踏み込み左手を振り下ろされる鉄パイプに叩き込む。

「へっ!」

鉄男の驚きの声と共に鉄パイプが折れ曲がる。

「しまいだ。ライダーキッカーク」

どの辺がライダーなのかはさておき綾鷹の跳び蹴りは鉄男の顔面を捉え、数メートル吹き飛び鉄男は気を失った。それから外れた右肩をはめ直す。

剣の方を見ると最後の1人を片付けに入った所だ。

それから剣が最後の1人に留めさしこちらを向いた。

第2話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。感想やコメント、誤字脱字があれば言ってお下さい。待っています。V

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3085/>

ニュース？澄透婁！

2010年10月9日22時23分発行